M44.3.10
2 M44.11 447

（四十四年六月十四日第三種認可）

岐蘇林友

明治四十四年十月二十三日印刷
明治四十四年十月二十五日發行
（定價三錢）
編纂兼發行人　長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地　安井正夫
印刷者　長野縣松本市本町百八拾四番地　兎澤忠雄
印刷所　仝縣仝市仝番地　交文社
發行所　長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地　蘆澤書店

謹白

彌々御清穆之段大慶至極に存上候扨客年三月本誌第十一號を以て得貴意置候通り新營校舍も逐次進捗明年度を以て全部竣成の運に可相成就ては教授資料の完備は益々急を告ぐる次第にて御承知の通り物資の力は教育事業の中心力には無之候得共設備の完成材料の蒐集皆一として資源に因らざるべからざるは言を須たざる義に有之然る處縣經濟に制限あるのみならず林業用標本器具は博物物理化學標本類の如くならず購入或は蒐集に甚しき艱難有之是非共各位の同情と援助に俟たざるを得ざる次第なれば御手數の段痛入候得共御在住地附近に於て

一、木材を原料とせる加工品
二、各樹種の利用方法を知るに足るべき工藝品
三、各地方特種木材林鑑
四、各種草本木本類醋葉及樹實
五、樹病に關する標本
六、森林動物に關する標本
七、各地方林業上使用せる器具器械類
八、林產製造品
九、林業に關する圖書寫眞及繪端書の類
一〇、森林に關する事業經營書類
一一、林業に關する講話並に諸種調査の印刷物及報告類
一二、森林に關する定期刊行物

等の材料蒐集に關し充分の御盡瘁に預り度但し所要の代價は出來得る限り學校に於て負擔の見込に有之斯くの如くなれば從來幾多の障碍も漸次減少し今後も益々然かあらん事明白なる事實に御座候固より創立僅かに十有一年未だ幼稚なるを以て抱負の大なる者あるも實力の之に伴はざる者多きは甚だ遺憾に存候得共積むに歲月を以てし各位の協力に依り諸般の設備を完ふし徐ろに林業界に新勢力を養成せん事切望に堪へざる所に御座候　早々敬具

學術

片々

江波多

澳國森林一般に關し『エンジエル』氏著澳國木材商工業の一節

澳國の地形大概丘陵起伏し西南に位する『アルプス』最高峯は一萬三千尺に達す而して全國森林面積は九百八十萬町歩にして全面積の三十二%强に該當す今其所有別割合を揭ぐれば左の如し

國有林　九、八
公有林　一四、六
教會所有林　六、五
世襲財產林　九、一
私有林　六〇、〇

而して森林面積の多きは同國十七洲中『ガリチーエン』『ベーメン』スタイエルマルク』チロール洲等其最たる者にして殊に私有林面積の多きは注意すべき點なりとす次に針濶兩樹種別面積の割合を揭ぐれば

針葉樹林　六〇、四
濶葉樹林　二一、二
針濶混淆林　一八、四

更に同國重要なる樹種別占領面積の百分率を驗するに

唐檜　四四、二　樅類　二、〇
松類　八、〇　唐檜樅混淆　六、二
カシワ類　三、〇　ブナ類　一六、七
カバハンノキ　一、四

之に依りて之を觀るに常に吾人の話頭に上

○本誌目次

○謹白、
○學術、片々、海洋と我國大粒種子の貯藏實驗、故郷の林業、
○拔萃、燒岳フン火被害調査
○文苑、駒ヶ岳雜觀、御嶽登山記、故山に歸る記、小品二題、佛都便り
○通信、學校近況、寄宿舍より叙
○雜報、任辭令、會費領收報告

るが如く位置地勢氣象其他の關係上澳國の主林木として取扱はるゝ重なる樹種は我國にありては今尚交通機關不備の爲め僻地に遺棄せられて顧みられざる者にして樹種に就きては彼我雲泥の差違ある事を見るを得べし然れども彼の林業上に念々不斷の精進を以てせるの事實は左記作業種別面積の割合により其一般を知るに難からず即ち

皆伐喬林作業	五六、九
擇伐喬林作業	二八、三
中林作業	二、九
矮林作業	一、九

更に年平均生長量は約九千萬尺〆而して最近一ヶ年伐採總額は用材薪材を合して七百九十五萬尺〆にして內國木材工業に原料を供給すると同時に他方には多大の材積を輸出しつゝあり蓋し同國々有林の多くは高山地方にありて大抵保安林に編入せられ且丘陵地に於ける者より生長極めて遲緩なれば此等莫大なる伐採額の大半は私有林よりせらるゝは明なる事實にして以て如何に同國公有林並に私有林經營の進歩完成せらるゝやを窺ふに難からざるべし即ち此等の森林は皆專門技術者の手によりて一面政府の嚴重なる施業監督の下に秩序的に管理經營せらるゝ者なり殊に嘗て本誌に記載せるが如く澳國木材工業の現著なる發達は其原料の供給豊富なる事實と相對照すれば同國民が如何に林業に傾注しつつあると同時に政府も亦林業を以て國家經濟の大本と定め百般の施設に努力しつつあるを察するに難からざるべし

『ラーデー、バルケン』に關し澳國週刊雜誌所載の一節

歐米諸國に於て農業用器具器械の著しき進歩を示しつつあると同時に林業用具に關しても改善せらるる者極めて多し即ち毎週大抵林業に關する新案特許器械類の掲載せられざるなきの狀況にして本器は瑞西國『シュワイタル』工場の製作に係り貨物を貨車或は荷車に積込み又は積卸しをなす際使用せらるる者にして其裝置は貨車の側縁より二本の鋼鐵製の梳を出し他端は地上に接す今積込まんとする貨物を梳の一端に近つけ基部に裝置せる車軸を廻轉せしむれば重量容積大なる貨物も極めて容易に二本の桁上を滑走して車上に達せしむる事を得べし又積卸しに際しても極めて便宜に取扱ふ事を得べし且二本の桁は其間隔て自由に伸縮し得るを以て木材の如き長大なる貨物も亦石或は金屬製器械の如き容積少なくして重量大なる者も亦容易に操作し得べし而して重量六百『キログラム』の負擔に堪ゆる積卸器は其價格六十圓一千『キログラム』の負擔力ある者は七十二圓なりと云ふ

海洋と我國

小松

昔より歴史に上りし事實を見るに最初海洋的に發展せしは『フェニキア』人種なるべし地中海は勿論帆船に乘りて太西洋より英吉利海峽に赴き更に南下して亞非利加海岸に至り貿易を行ひ一時は天下は『フェニキア』人の獨舞舞なりき其後彼の有名なる『ペルシア』の『ダリウス』大王及び『ゼルクス』大王と戰ひて打ち勝ちし希臘は波斯に代りて非常の大勢力を得しを以て一時『フェニキア』の勢力は衰へしも其分身たる『カルタゴ』は再大發展をなし地中海よりバルチック海に至り航海と云へば必ず『カルタゴ』人の手に歸しぬ希臘人も決して『ヂュニス』岬より一歩も西航すること能はず『ジブラルタル』海峽は勿論出づること得ず『カルタゴ』人は西亞非利加の半分よりも遠く北方に廻り英吉利丁抹に貿易を行ひ蒸航海業を盛に進歩せり諸君羅馬史を讀みて『シーザー』と『ハンニバル』の如く記臆に存するもの他に少かるべし而して『ハンニバル』が父よりうけたる教訓を固守して羅馬を殲さずんば『カルタゴ』は存在せずと決心してカンネの大戰に大勝を得羅馬は一時大悲境に陷り七百艘の軍艦をも失ひしが此の二十三年間に五回海軍を復舊して遂に『カルタゴ』の海軍を打破り海上の權利を握り流石の『ハンニバル』も內治外交兵備に全力を盡したれど『カルタゴ』は滅び羅馬は地中海の權利を得て通商航海を獨專して後益隆盛となりぬ而して即ち世界的展開には海洋的なるを要する所以なり其後羅馬は亡びゼノアー、ベニス、西班牙和蘭の最盛期ありしが佛國は英國に破られて最後の勝利は英國の手に落ちぬ嘗て和蘭が海洋的運搬業を自已の生命として世界の各方面に於ける商業は悉く和蘭人の手にありて『アムステルダム』は世界の倉庫なりき此時に當りて英吉利は海上事業を立國の精神とせる國柄なれば自然の衝突は兩國間に起り有名なる英國の『クロムウエル』千六百五十一年に航海條令を發布せり其內容は四ヶ條にして畢竟英國の海運業を盛にせん目的なり即ち第一に阿非利加、亞細亞及亞米利加より出る品物は英國或は英國殖民地の船の外は一切英國の港に入ること能はず第二に歐洲大陸より出づる品物及其製作品は英國の船又產出國の船にあらざれば入港を禁ず第三を略して第四には以上の禁を犯すときは所と場合とを問はず其船と品物を悉く沒收し其一半は政府に一半は告訴者に與ふとあり是れ云ふまでもなく和蘭に對する宣戰の言なり從來和蘭の船により英國に輸入せしものなれば此條令の爲

めに和蘭の船は英國に入港すべからざる結果を生ず當時『クロムウエル』は英國は必ず海上主義たらざるべからず如何なる手段を講ずるとも和蘭の海上事業を絶滅せんと考へしより結局英國は非常の不便不自由に陷り物議喧しかりしも屬行すれば遂に自ら海運業も行はざるべからず工業も盛ならしめざるべからずと覺悟すべく從て商業工業發達し國富を增進すべし和蘭の事業は英國に移るに從ひ和蘭を擊破するに足る海軍を必要と認め擴張したれば遂に今日の英國の盛況を見るに至りしなり而して英國も我國も共に嶋國なれば大陸的防備必要少ければ海上に發達するに好都合の國と云はざるべからず海上に發展する國は即ち世界の指導者となり最强最富國となる所以なれば三年來神聖なる歴史を擁護し奉りたる國体を更に安全に千萬年に亘りて光輝を世界に發展するは唯海上にありと考ふる次第なり

而して我國民は全く海洋的精神に富めり古史を察するに天の鳥船の神を建御雷神に副へて遣はしき之れを以て此二柱の神出雲の國の伊那佐の小舘に降り倒りて十握の劍を拔きて波の穗に逆に刺立てて其劍の前にあぐみして云々とあり海洋的なりしこと見ゆ又傳說には因幡の兎浦島太郎、竹取物語カチカチ山、桃太郎、鬼ケ島退治等海上のことに屬す、或は和倭寇山田長政等の冒險的精神に富めること明かなり三韓征伐豊太閤の遠征日清日露の海戰悉く我國民の海洋的なることを証せずや

地理的關係も國民的資格も皆立派に海洋的發展をなすべく眺向なり即ち世界に雄飛すべき大國民なり否寧ろ此の如く發展せざるべからざる大國民なることを自覺せざるべからず

栗櫟等大粒種子の貯藏實驗

高樋　博

今茲に栗櫟等大粒種子の貯藏に關する余が二ヶ年間の實驗成蹟を掲げん（編者曰く之は前號同氏の原稿中のもの誤て編輯漏となりしを以て茲に補ふ）

四十三年度試驗成績

樹種	法方	數量	腐敗量	總量に對する腐敗歩合	備考
栗	土圜	九、八六	一、一二	一二%	砂に貯藏する地下三尺
	鋸屑圜	一、三〇	〇、〇七		
	第一同上	〇、九七	〇、三	二	地上に積みたるもの
	第二				地下に貯藏したるもの
	折衷法	一、三七	〇、一七	一三	地下に鋸屑と砂とにて貯藏せるもの
	計	三、五〇〇	一、五七		
櫟	土圜	四〇〇	一、五〇	三	
	折衷法	四〇〇	〇、〇三	七	
	計	四、〇〇〇	一、五三	五	

四十四年度試驗成績

樹種	法方	數量	經費	總量に對する腐敗歩合	備考
石		圓			
栗	鋸屑圜	八、一六	八、九九五	七%	一石に對する貯藏費一圓〇五强
	砂圜	九、六五	一四、五三四	九	
	折衷法	二、〇〇	二、五九〇		
	計	一九、八二五	一七、一九	一三	一、二九强
胡桃	鋸屑圜	二、四〇	二、六三六	六	一、〇九强
	砂圜	四、七〇	四、六二四	四	九强
	折衷法	四〇	四四五	六	一、一二强
	計	七五〇	七、〇五		
櫟	鋸屑圜	六、一五	三、九八五	六	六四强
	砂圜	八、五五	五、三一五	四	六二强
	折衷法	一、三〇	一、七五	一〇	九〇强
	計	一六、〇〇	一〇、四七		

胡桃櫟の鋸屑圜に比し砂圜の成績良好なりしは貯藏場所及土壤の關係にて鋸屑圜の良好なるものは更に腐敗を認めざる個所なり

故郷の林業

塚田　大

長野市を去る西北約五里櫻花の上流に一村落あり我慕はしき故郷とす地勢上林業を以て生業となすべき所且又廣大の山林あれば林業を行ふ好適地とす古來斧のみならず人跡さへ稀なりし拥山地方の深山も近年年と共に伐木行はれ日に月に開墾は進みて森林は漸減せりされば今年の如き櫻花沿岸の大洪水大被害を見るに至りぬ森林と洪水は密接の關係を有するものなれば林地の開墾は害を益大ならしむるものなり而して開墾に當りては夏季に樹皮を剝きて枯死せしめ翌年火入をなして燒拂ふを常とすされば枯死落葉より成立せし朽土も燒棄するを以て林地を痩惡ならしむること蓋し大なり樹幹に穴を穿ちて火藥を以て倒すこともあり我故郷の森林開墾に伴ふ濫伐の狀此の如くなれば山腹の缺壞崩潰甚しく洪水は迚年其害を絶たす林產物の缺亡も亦近き將來にあるべし此二方面より戒められたる村民は今や植林の必要を深く感じ或は講習會を催して愛林思想を養ひ或は我母校は五十町歩の學林を設けて模範を垂れつつあり又村有林は面積小なれども各戸に配當して造林を行ひつつあり

附近の林產物は桶材屋根板木炭とす就中木炭を主となし越中越後の製炭夫によりて製す昨年の如き講師織田氏を迎へ製炭講習會を開き改良の方法を講せり毎年六萬貫の木炭を輸出せり又木工と去て盆茶筒筆立等日

用品を製作す
副産物には落葉、栗、松茸、シメヂ、シモフリ等あり野獸には兎狸熊猿栗鼠鳥類には雉子山鳥を主とし其他小鳥類多ければ森林家の最も樂むべき狩獵にも好き地なり
掬の皮より簑を作るは他に例少きことなれば附記す

拔萃

燒岳噴烟降灰被害調査

第一　總說

我信濃地方に於て燒岳と稱するもの之を飛彈地方に於ては硫黃岳と稱し却て其傍に硫氣孔の存する一小丘を指して燒岳と稱するが如く名稱何れを以て正となすべきにあらざ雖近時噴出に係る前記信濃地方に於て稱する燒岳は信飛國境に存し過半其の地籍を飛彈の地に屬すると又飛彈吉城郡中尾蒲田附近より之を望見し得ると而して信濃方面にては燒岳の前方に當り霞澤岳（海拔二、六四五米突）の秀峯横はり之を望見することを能はざるときは飛彈地方に於て稱ふる硫黃岳の名恐らくは多く稱呼せられたる所あるべしと雖も之に登山するもの信州松本方面よりするを便とするが故に多くは之より登山し從て燒岳の名硫黃岳の名稱に比し世人に傳ふる所或は廣きに渉れるものあるべきを信じ玆には其の名稱に從ふことゝなせり

燒岳の登山は信飛兩國共に中尾峠よりするを便とす該峠は實に燒岳の北山腹にあり此峠を東西に各一里半を降れば一は安曇村の上高地温泉に出で一は上寶村中尾區の一部落に出づ峠の嶺より噴火口まで約五町餘に過ぎざれど嶮岨なる急斜面なると燒礫累々たるが故に行程實に二十分以上を費すべし

地形。燒岳火山の外貌は恰も笠を欹せたるが如く所謂乳房狀を呈し頂上に噴火口を存す山側は稍々密林を成せるも頂上は爆裂作用の爲山骨露出して舊噴火口壁は三個の峭壁に分立し南方のもの最も高く此に參謀本部陸地測量部等三角点あり此位置海拔三四四五米突にして北緯卅六度十三分二十五秒に東經百三十七度三十五分十四秒に位せり

（イ）山頂從來の爆發口は舊噴火口の中央少しく西に偏せる所にあり而して現在盛に噴火しつつある處は之より尙西方に當れり故に火口を生せしものの如し而して東南北の三方の斜面は絶壁をなして深く火口に臨み爆發裂に依て拋出せられたる岩塊岩屑は山頂を被覆し假松の繁茂せしと認め得べき一帶の地を己に數年前に荒涼なる瘠薄地と變せしめ又在來の谿谷に沿ふて泥土の流下せるものあり

（ロ）中腹及山麓中腹は特記すべき事なく只從來の樹木は明治四十年の爆發以來の噴煙の爲め枯損し其材積一万尺〆に及べり山麓は普通の火山にある如き褶野的原野を見ず只上高地に面し比較的緩斜なるは泥流の跡なるべく此末端は霞澤岳との間に田代池を停滯せしむ而して山麓一帶の樹木は今回數十度の爆發噴煙の爲生氣を失ひ荒涼たる有樣を呈するに至れり

地質。燒岳の基底部は主として水成岩類に依り成立し之を貫きて花崗岩及其れより分化したる諸種の迸出岩あり水成岩は石英石粘板岩及硬砂岩等上部をなし下部に石灰岩あり走向は概して西北にして傾斜は一般に急なりとす火成岩は東部霞澤岳地方に於ては角閃岩花崗岩類あり之に次で石英班岩類あり北部に廣く分布す

燒岳火山を中央として東北に割谷山南西に白谷山在り皆同一の岩類より成る故に之を一括して燒嶽火山彙と稱し得べし而して是等の岩類は悉く同一種なる雲母及輝石を含める角閃岩に屬せり

第二　噴火狀況

活動の歷史

燒嶽の隆起に先ち白谷割谷の二火山は古生層の山地に隆起せるものにして此兩火山より噴出したる熔岩は最後に兩火口の中間に噴出口を求め初期の爆裂に次ぎて多量に燒岩を數回溢出して燒嶽を形成せるものなるを認ひべし而して火山の活動が漸次減退し熔岩の溢出歇みんと雖尙地下に冷却しつつある岩漿より分離せる瓦斯は鬱積して屢々爆裂作用の原因をなし爲に今日の如く破壞せられしこと尠からず

有史時代に於ても天正十三年（西歷一、五八五）に噴出し山麓にある中尾の村落を埋沒せしむる等の事實あり爾來燒嶽は活動大に減退し山頂にすら樹木雜草の繁茂するに至りしが二三十年程以前より燒嶽に硫氣孔を生じ漸次其の勢ひを增し且つ山頂の南方面に擴張し爲に中尾峠附近の樹木は枯死するに至れり

斯くて明治四十年十二月十日遂に山巔に於て爆發作用を現出し舊噴火孔底の一部を突破して噴煙するに至れり然れ共只山頂の舊火口内に於て時々小破裂をなし居たるに止まりしが突然明治四十二年三月二十三日に於て大暴裂をなし此際山頂に於ける舊火口緣は三分せられ摺鉢狀なりし火口一變して井戸狀の大孔と變じ拋出せられたる大小の岩塊岩屑は山頂を被覆したる等大に地形を變せしめ且つ風向に從ひ信州方面に多量の降灰を見たり斯く

激甚なる爆發に伴ひ降灰あり亞硫酸瓦斯を含めるを以て附近の樹木年々衰へ中腹邊には已に枯木を生ずるに至れりと雖も未だ幸にして大害を見るに至らずして以て本年に及べり

平時の狀態

燒嶽六七月の如く屢々大爆裂を現出せざる以前までは著しき變化を見ず噴火口は舊噴火口の東北隅火口火口壁の内側に在る楕圓形の孔にして微かに『サー〳〵ゴー〳〵』と云ふ音響をなし靜かに噴煙するのみ音響の稍々大なるときは噴煙却て減少し音響微となれば噴煙增加す斯の如きこと數分間を以て反覆せらる而して噴煙强盛なるときに在りては四邊に灰砂を降すも常時は極めて細かき帶青白色の灰を水蒸氣及亞硫酸瓦斯等と共に噴出するのみにして火口には附近の大小數十の硬氣孔あるを以て此等の孔口には硫黃昇華を見る

最近爆發の狀況

前述の如く五月中旬までは穩かに噴煙しつつありしも漸次勢を增し下旬に於て二回の大爆發をなし安曇村烏川村邊一帶に降灰を見るに至り之より益々降灰の度數を增し六月の下旬より七月中旬迄は五日目三日目甚しきときは毎日或は一日に二回三回も爆發に伴ひて降灰するに至れり今七月に入りて爆發降灰せる時日を擧ぐれば左の如し

一、七月七日午後一時半頃是れ本月第一回の大爆發にして鳴動約二十分間に至り爆煙は北方に向ひ降灰多量なりし

一、七月十日午前十二時半頃本月第二回の爆發にして黑煙天を俺ひ降灰區域頗る廣く北安東筑及更埴両郡邊に及びたるものの如し此日尙午後に於ても大爆發をなし黑煙中閃々たる火光を認むるを得たり上高地温泉塲に於ては黑煙日光を遮り爲に晝尙點燈せりと云ふ

一、七月十二日午後八時第三回の大爆發して降灰區域又前回同樣にして松本市附近を中心とし降灰量最も多かりしを聞知せり

一、七月十七日午前二時半頃第四回目にして本月中に於ける第一位の大爆發にして又大音響を發し上高地にては戸障子に反響し隨て降灰量又多く孔口より十數間隔たりたる處に於て長二間巾九尺の大岩石の落下せるあり其他無數の石塊を噴出し附近一帶に累々たるを見る而して噴火口は爆發の都度多少の異動あるものの如くなれども此爆發に於ては西北方約百間程を異動せるを認めたり

一、七月十八日午後五時四十分頃及十九日午前零時半頃に於て爆發せるも音響は殆んど耳にせず隨て降灰も亦尠なかりき

以上は其爆發の大なるもののみを揭げたるもの小なるものに至つては猶數項に亘れり

第三　固有林に對する一般の被害

噴燒の含有物其樹木に對する影響

降灰の含有物に就ては化學的分析を爲すにあらずんば正確に知るを得ざるも噴煙中に青色試驗紙を晒すときは忽にして赤變するを以て甚しき醋性を有するを知る而して色嗅等ありて多量に亞硫酸瓦斯硫化水素等の酸化物あるを知る之等硫化物特に亞硫酸瓦斯は植物に最も害を與ふるものなるべく其百萬分の一の容積を含むも已に有害なる程なれば今回の爆煙の如きは極めて多量に之を含ひを以て短日月なる不斷的ならざるとに拘はらず其害甚しく普通一般の特徵と異り針葉樹に有りては新芽に活力なく叢鄙黃變して恰も霜害にかゝれる如く濶葉樹に於ては葉色黑色に變じ乾燥し全部枯死せるもの多々あるを見る蓋し此亞硫酸瓦斯は植物体に入り先づ葉中にて硫酸に變じ之が水分を吸取するが故に細胞中の水分急に缺乏し爲に其の細胞が乾燥して活力を失ふものなるべし又普通鑛山に見る煙害と異なり降灰落石のあるを以て其害も大にして灰は甚しき粘着力を有し降雨に會ふも葉面にある灰の全部を洗ひ去らるゝことなく爲に有害物は葉の吸收する所となり一方氣孔を塞ぎ呼吸作用及同化作用を害す之が故に附近の樹木は秋季に於けるが如く葉落し又落石は其の害遠方に及ぼすにあらざれども噴火口近くの樹木は折損せられ直接其大害をなせり

一、煙害地の分類

降灰の多少樹木の被害程度に依て假に之を三ッに分たんとす

一、煙害激甚地

已に枯木を生じ或は生じつゝある處にして現狀を持續するときは將來植物を生育せしむる見込なき處は即ち字横尾下尾根より上堀に至る國有林中一一九林班の大部及一二〇一二五林班の上部字上高地德吾より大平に至る國有林中八三、八四林班の一部及梓川筋産屋より霞澤迄國有林中八二林班の一部にして其面積八百町歩に及べり而して其區域は四十年十二月爆發以來害を被り已に枯木となりしものなり即ち左表の如し

四十四年六月末日現在

樹種	本數	材積	備考
栂	三、六三九	二、〇七一尺〆	六三本書には噴煙のため立木の儘枯死せしものを掲上せり以下同じ
唐檜	一、九二一	一、〇九一	六一
白檜	三、一三三	二、〇五一	一二
縦	四〇三	四三八	八七
五葉松	四〇三	八八	三
雜	七六一	四七〇タナ	〇六
計	一五、二六〇	六、四七一尺〆	四四
		四七〇タナ	〇六

而して其他は本年の活動にあり泥流泥灰等の爲に枯れ或は落石の爲に倒れ或は降灰甚しく葉面に灰白色を呈し針葉樹の新芽は枯死し濶葉樹の葉は凍傷に遇ひたるが如く枯れて荒涼慘憺たるの狀態なり

二、煙灰被害地

未だ新芽小枝は枯死するに至らざるも著しく生長力を害し開花せざるあり又開花するも結實せず落葉せる程にあるものは即ち字横尾下尾根より上堀に至る國有林中一一〇乃至一一五の六個林班の大部分及一〇七、一〇九林班の一部德澤より古池に至る國有林中八九、九〇林班の一部上高地德吾より大平に至る國有林中八三、八四、八五、八六、林班の大部及八七林班の一部梓川筋產屋より霞澤迄國有林中八一八二、林班の一部梓川筋下堀より倉洞渡迄國有林中一一九、一二〇、一二一、一二五林班の一部にして面積約二千町歩に及べり此區域は現狀を以て永續するときは爲に普通の施業を營むこと能はざるものとす

(三)降灰地

多少其程度を異にするも安曇小林區部内に降灰を見ざる處なし

就中水殿川團地最も甚しとす然れども短日月にして格別降灰による被害あるを認めず

以上被害の程度に依り之を三區域に分類すと雖も普通の煙害と異なり常に絶へず降灰するにあらず大爆發の時其被害を見るものなるを以て數日を隔て爆發するときは其間に多少恢復する處なきにあらず少恢復之を以て今後の爆發程度に依ては第二第三區域の如きは大に變化あるべきを免れざるべきか而して現今の被害の有樣は孰れも急激に及ぼせるものにして漸次徐々來せる徵候なし故に昨今爆發降灰をせざるに至り且つ連日降雨の爲め葉面に積り灰の大部分洗ひ去られ今や益々生力を回復しつゝあるを見る

被害の多少に關する事項

一樹種一般に濶葉樹は針葉樹に比し被害多し就中薄葉のもの最も甚し噴煙に伴ふ瓦斯等の多量急激に作用し隨て瓦斯吸收の分量多きに因る故に草本殊に廣濶弱薄のもの甚し而して其最も感じ易きはハンノキ、シラカバ、ニレ類、トチ、ヂナシ、トネリコ

松類イチヒ、ツガ等

林の位置

噴火口の近くにあるもの最も害を受け易く遠きに從て少なし而して風下に位するもの害多く且灰煙に直接に當るもの甚だし

天候

光線濕氣の量は害の多少に影響するもの如く日中は夜間よりも害多く初夏の候樹木の生長旺盛なる時期及霧等に葉濕潤し居る際に其害最も甚しとす之れ露の如きは瓦斯を空氣中に長く保留すべき作用を爲すが故に此結果を認むるものなるべし之を以て雨後日光の直射する時亦其害甚大なりとす

今回の煙灰にして國有林に及ぼせる被害の多少は一に燒岳の爆裂噴煙降灰の多少度數及風向に依るを以て燒岳の噴煙にして七月中の如く殆んど毎日或は隔日にあり且同風向なるときは國有林に及ぼす害從て大なるべく反之昨今の如く大爆發なく從て降灰の量少なく且風向一定せざるときは被害も少なかるべきのみならず一旦害を被りたる樹木も未だ全く枯死するに至らざれば漸次回復に向ふべし故に被害の程度は今後燒岳活動の如何にのみ因るとゝふべし

今燒岳大山の活動の歷史に就て見るに彼の天正年間の大爆裂の後活動久しく中絶せるも明治四十年に至り再び山頂に爆裂作用を現出するに至りしものは即ち休眠の覺醒せるものにして爾來時に緩急あるとも引續き今日に及べり故に燒岳は破壞時代にあるものにして驕ては再び休眠するときもあるべく去る七月十一日に一大爆發せしが最後にて漸次衰ふるに至るべきか果して然りとせば今後多少の爆裂永續するとするも國有林野に對し甚しき被害なかるべきを認むるなり

豫防法、普通鑛山等にて起る煙害等と異り爆發力降灰量等も大きく且つ高處より風向に從て降下する故被害急激に及ぼし且區域も廣き故豫防法として今之が適切なるものを發見せず且其噴火も前述の如く不斷的ならざるが上其永續も目下疑問に屬するを以て今俄に大なる經費を投じても尙之が豫防を計畫するに就ては躊躇せざるを得ざるなり且區域も廣きに涉るが故に到底豫防法としては適當なるものなしと雖も其被害あるべき程度を多きに致さしめざるべき方法には之を他日の研究に待たんとするものなり

文苑

駒岳行雜觀

竹軒

◎寄宿舍前夜の光景　登山の前夜一寸舍を見舞ッて見た。門前は舍生の出入が頗る頻繁である炊事場まで行くと炊事委員は明朝携帶の糧食の出納や分配に忙殺されてゐる炊夫は目を圓くして狂奔してゐる。正に是れ動員令一下した兵營の光景其まゝであッた。

◎晴乎雨乎　夜、早寢をして一睡して覺めると電燈を點つて見たまだ二時だ。之は早いと又寢を極めて四時に目がさめた。立ッて戸を推すと雲霧低く迷うて山を包んでゐる。晴か雨か容易に判定はつかぬ只虫聲雨よりも稠い曉である。

◎一軍進發す　午前五時半一分の懸値なしに校門を出發した。中央橋を渡つて町の後に出て伊谷の谷に這入ッた。山形の檜笠ゆかしく莫蘆を朝風に飜し。金剛杖を突き立て。穿き立ての草鞋の足取輕くスタ〳〵行く一軍の後姿は實に英氣颯爽たるものであッた。

◎親子の案内者　伊谷の谷を少し行くと湯澤河の清瀨に出會ふ。村の名は正澤村。案内者は此處の住人で而も親子である。爺は五十餘、子は十七八の少年だ。『爺は學校から隨いて來たが此處までくると川岸の自分の家へ子を呼びに行ッた。『爺サンいゝ所に住んでゐるナア』と誰やらが羨望の聲を放ッた。

◎雲破れて日出づ。正澤村から幾つも坂を上下した。人も餘り通はぬ山道で草は人を沒する位。夫に朝露がドッシリ置いてある金剛杖で拂ひ〳〵行く中に東方の林間が明るくなると思ふと金色の朝暾が樹間を洩れて來た。有望！有望！もう占めたと一行の元氣が俄に百倍する。

◎林下の美人　俗稱赤林といふ山に差しかゝッた。針葉樹や濶葉樹の鬱茂せる山で林下は蘚苔滑かに恰も青氈を敷きつめた樣である。こんな所で所謂森林生活を遣ッたらどんなものであらうと思うた。行く手に當ってクッキリ色白の美人が笠を傾けて立ッてゐるのに折々出遇うた。此美人の名は一樣に『たたけ』と云ふとう ナ。

◎困ッた時の晝飯　前岳の絶頂へ近づいた時の事であッた。K君が先鋒で細徑を辿り〳〵來るとッイ道が亡なッて仕舞ッた。矮樹が密生して居るので先へ進む事が出來ぬ後へも退けぬ。一同大弱り。K君はどうしたのかと呼んで見ると是は又悠々握飯を食つてゐる曰くサ『食ッてからフン別が出るヨ。

◎七彩の長橋　萬難を排して矮樹を潛り拔けると稍平地を綾た。是より上は偃松帶で前岳の頂上の三角標が間近に見える。此處で一同申合せた樣に腰を下したと見ると來し方の眼下に當ッて一道の紅霓がアーチを畫いてゐる。而も其背景が濃綠の山であるから七彩は實に光芒離離として燦然たる美を放ッてゐる。一同は思ひがけぬ此山中の奇觀に見惚れた。うゝして夫を肴にうまい握飯を頬張ッた。

◎大冒險家　折角上ッたと思ふと又惜氣もなく下る處は是迄幾箇所もあッた。前岳の三岳標の所からは又四五丁も直下するのである。夫を知らずに先鋒は山の脊を〳〵向へ行く。其處は山骨が一列に露出して一方は大懸崖を形成してゐる。而も岩石は皆縱に割れて居て足をかけるや忽ち崩落するのだ案内者が危いと云ふので大聲を擧げて返せ〳〵と呼はるけれど聞えぬのか絶壁の岩石を踏み落し踏み落し行くのが聞える。其音は轟々として雷の如く遙かなる谷底に至ッて止む。後で聞けば此急先鋒は唐澤君であッたとうナ。

◎山中の豪雨　前岳の三角標を胸の最高峰と思ッた連中(實は僕も其一人)は頂上へまだ一里もあると聞いて少からず落膽した。夫に三角標を下り始める頃から山雨が襲來して漸次猛烈となッたので金く意氣沮喪の躰であッた。案内者は山刀で徑を塞ける枝を刈り拂ひつゝ行く。此邊には夜叉の木といふが澤山ある。此木には肉と稱へる赤色の茸が生ずる之は御嶽信者の尙ぶもので煎藥として風邪によく創傷に大効があるとは案内者の話であッた。

◎山小屋の雜沓　腰から下はズブ濡となッて山小屋へ着いたのは午後三時頃であッた小屋の廣さは十五坪位であるから吾等の一行五十二名で既に一杯である。尾張の御嶽講の一團六十餘名が到着したのだ。總勢百二十名詰め込んだのだから丁度一疊に四人の割合だ。どうして足掻がつかう折り重なッて寢るより仕方がない。夫に蒲團は〆て十八枚しかない。七人に一枚位の宛だ。夫はまだしもよいとして我慢の出來ぬのは炊事場の煙である。漠々漂々として鼻と云はず目と云はず口と云はず容赦なく襲擊するには殆ど閉口する。彼方でも此方でも苦悶の聲を擧げる。此間にあッて誰ぞや講中の一人は駘聲雷の如く何の苦も知らぬ樣であッたのは羨ましくも憎くもあッた。

◎山頂の偉觀　山小屋を出て見ると頭上に巨人かと怪まれる石峰が聳えて其麓から一脉の山嶺が右に走つて居る。出輪鄰の峭拔なことは言語道斷である。其山の脊は刀の刃の如きもので折々石切が腰に繩を付けて通る事がある許だと云ふ。猛然として殺到する嵐は山の側面を壓して同時に眞綿のやうな雲が奔馬の如く驅け過ぎる。自分も固より雲中のものである。兩脚が雲にさらはれはしないかと危ぶまれた。

◎歸路は上松さして下ッたが道は總じて急峻で到底御嶽の比でない。昨日の講中には幼い女人も見えたがよくこんな所を登ッたものだと感心した。然し道はよく整理して階段なども設けてあり一本道だから迷はない八合目邊には盆栽に恰適な二三尺乃至四五尺位のシラビが一面に生ねてゐる。是等は數十年の星霜を僅か二三尺の樹幹に疊んでゐる。而して雨や雪に壓された枝葉は屈曲撓めたるが如く其自然の風趣は眞に掬すべきものがある。山を下り切ると滑川の谿だ乃ち源を駒に發する。夫から暫くして德原といふ一小村に至る。村と云ッても五六の茅屋がある許だ而も駒ケ岳上松間唯一の立て場である。今朝早發した講中の一團は此處に休んで盛に晝飯を使ッてゐた。こゝより一里して上松だ　（終）

御嶽登山記

龍尾生

初秋の天に聳ね立つ夏でも寒き御嶽山に登るべく待ちに待ちたる九月十五日の早曉あはれや宵の程より天候險惡にして雨さへ降り出し一時は絶望の淵に沈みしも幸なる哉團々たる黑雲は次第に薄らぎて朧ながらも星光を認むる嬉しさは勇みに勇む一行三十五名呉座金剛杖の出で立甲斐甲斐敷く七宮北村兩先ヤ引率の下に勇氣凜々として（駒ケ岳行と別れて）校門を發す時は午前五時半なり

町人の寢惚眼に兩戸を繰る下町清水邊を過ぎて『御嶽登山道』の石標を左手に行人滿を打渡る中畑より幾程もなく一ノ鳥居あり是より勇める足も輕々と矢久保峠を過ぎ御嶽山遙拜所の設けある合渡峠に至りて一休す前方には一行を迎へ顔なる御嶽の雄姿を望んでは壯心勃々として禁ずる能はず暫く暇に三岳村黑澤に至る福嶋を距る二里半なり

尙も進みて樹山を經二合目に達す三合目よりは漸く爪先上りとなる四合目に至れば瀧あり松尾瀧と呼ぶ此處にて晝餐を喫し再び急坂を登る登り盡くす所は即ち眞砂草原にして此間一里なり折柄日光雲間より洩れて坂路に苦しむ一行を照らす（此時は既に健脚にて先登せしもの弱卒にて落伍するもの等さま〳〵なり）流石城山の健男子も少なからず勇氣を挫かれしが前方一頂上を仰いでは足も自づと輕く千本松に着せしは正午近き頃なりき

五合目を過ぐれば鬱々たる森林に入る溫帶林なり此林を『扇ケ森』とか名づく昔醍醐帝の御代に白河殿勅を奉じて登山せし時此森に扇を忘れしより斯くは名づけられしといふ道は木の根蟠りて蜘蛛の巢の如し是を過ぐれば木の階段なり登り登りて六合目に達す七合目まりシラベ、トウヒの繁れる間を登り登り盡して八合目に達す是より路はいや增しに險となる故に登山の人は此處にて再び身輕なる準備をなすなり小屋の傍には苔草鞋小山を築く草鞋の紐を引き締めて出づれば頭上に高く九合目の石室一行を待ち詫び顏なるも如何にせん足の重き事鐵脚を曳くが如く實に一歩一喘の有樣なり『六根清淨……』と唱へ乍ら行く行者と相前後して上る

是よりは寒さ頓に加はり漸く九合目に達すれば既に呼吸の急を覺ゆ茲に休憩の後又出づるに殘念なる哉四方の眺望は霧の爲めに鎖されて雨さへ加はり强風之に和して一行の意氣を消沈せしむされど霧の間より頂上の近づくに勇を鼓して進む道はすでに石道となり石段となる漸くにて頂上に達し西方に千古の雪積る二ノ池を見る一萬尺の高處に碧水を湛へ靈氣身に泌みて凜然神龍の潜むかを疑はしむ三ノ池を徹に望み登りて一ノ池を見る此池は纔に形を存するのみなり漸くにして頂上の石室に至る時に午后四時なり直ちに郵便局に至りて親しき友に繪葉書を出すもの或は劍ケ峯なる御嶽神社に參拜するもの等あり寒暖計は攝氏八度を示し呼出氣は白く冷風雨と和して至れば俄に雪と化して肌に粟を生せしむ

やがて遲れしものも來り互に火鉢炬燵を圍みて煙に攻められながら談笑に時を移せり此時は最早四方は濃霧の爲眺望を得ず從て風雨の音のみ高く折角の二ノ池三ノ池圍りは誰一人をして賛成するものなし夕食を了へ三人に二枚の煎餅蒲團に包まれて寢に就く

明けて十六日轟々たる風音に淡き夢を奪はるれば最早御來光御來光と騷がし起き出でゝ見るに依然として雨は止まず殆も余等を呪ふが如し噫唯一の望の眺望は遂に絶望に歸せるが余等は何が爲に登りしか不味なる飯を食ひ且又唯に疲勞せんが爲に來れるかと黑痴々々朝餐も早々に了へ七時（池圍り地獄谷行は中止して）强力を力に王瀧四指

して下山の途につく時に天公怒つてか猛雨沛然として至り烈風砂石を捲き上げて急ち雨益を覆すが如し足下の雲には霹靂一聲紫電一閃と共に雷鳴を聞く一行濕れ鼠となり一歩を誤れば千仞の谷に落ちなんとする細道を戰々兢々金剛杖に賴りて八合目に至る時に雨漸くにして晴れ風收まる仰ぎ見れば山頂は暗雲の中に鎖されて暗澹たり

亦もや辷る道を杖に七りて下りしが田ノ原の自然の大公園には久しく恍惚として去る能はざりき五合目を過ぎて森林に入り（三笠山には上らず（例の木の階段を下りて草原を經三合目に至る是より尙下りて清瀧の勝を探らんと横道に外れ一丁餘にして達す飛瀑二十丈飛沫濛々として一片の煙霧をなし實に眺もあかぬ景なり是より亦下りて新瀧の景を見むとて四丁餘の山道を上る此瀧は一名裏見瀧とかいふ宜なる哉其名に背かず突出せる懸崖より水空に漲り下ること驟雨の如し是を裏に廻りて見るを得是より厭ぬ眺を惜しみながら疲れし足を曳きつゝ空きし腹を抱へて十二時王瀧村上嶋に着玆で鱈腹食して先下腹を拵へ後瀧氏の家にて北村先生より注意あり此處にて解散各自々由行動となる是より鞍馬大岩二橋の勝を賞して澤渡峠を越え澤渡に至りてコヅヤてふ奇妙不可思議なる木の瘤を飾れる家の中を通り抜け王瀧川に架せられたる常盤橋を渡る碧水脚下を洗ふて風光頗る佳なり

三時頃より雨又もや降り出す王瀧川に沿ふ坦道を辿り福嶋に着きしは電燈の光も淡き午后六時なりき　（完）

故山に歸るの記　（續）

かりがね

翌くれば三十日、フイと眼を醒ました時は誰一人も居らぬ、氣がつくともう汽船の間にも合はない（實は一方家から來るべき乘船券をまつ心もあつたが）えゝままよと昨夜の殘りの林檎などを平げて、朝餐を食つた間もなく晝餐を形の如くに濟ませバネの如くに飛び出した。

然し何處といふ的もないのだ、今日は白山浦で自轉車競爭があるといふ、宿の女主の言を思ひ出して其方向に針路をとる往いて見ればいや澤山の人出、暑さはいよ〳〵激しいで一回の競爭もうこ〳〵に劉曉たる樂隊の音を松風にまぎらして、新潟一の古町通りに出た、さすがは賑かである、○○といふ氷店へ飛込んで、はふる汗を引つ込ませ、心地よいのに任かせて大川前通りに出たが夜ほと面白くない、うこで方向轉換（幾つかの町を過ぎり）常盤ケ岡のドンを右に松林を拔けて濱へと進んだ。

砂路は深い、うこにかけ渡された一枚の板路を往來する人は、恰も蟻の行列のよう。礫に出た。遠くに近くに立つてる茅小屋には、衛生支部や赤白の小旗が、打靡いてる、點々と見える黑人は、遠く構太の膃肭獸を偲ばせる、

をりから一際目立つて、○○聯隊の兵士が中隊の旗を押し立て、遊泳中である、陸には角力が始まる、見物は黑垣のようだ、見ると髪の上等兵らしい奴が、三人拔きをやつて鼻が高うなつてる所、ドーど押寄せてくる、浪の上では今三人の兵士が、己から舟を覆へらして戲れてゐる河口の方には、大きな黑船が數々帆船の間にゆつたりとして、錨を下ろしてる しかし僕の視線は、故郷の山が離れない、見よ波路遙かに横はる嶋影、南北兩山脉の分れ目にヌッと頭角を現はすは金北山である、

あゝ、明日の日和がまち遠いて此夜は又も花火見物である、連れは昨夜の二氏の外に又も、MNの兩氏、しかも皆同郡の人だから嬉しい。怪しの空は橋畔に出た頃。果たしてポツリと來た、ろれがだん〳〵嵩じて、はてはドッと矢を射る如く降り出した。

急いで橋下へと逃げ込んだが、右に左に狼狽する人は、氣の毒といふより寧ろ滑稽であつた。急ち橋下はギッシリ詰まつた。こん度は雨ならぬ汗でビッショリ。濡れる仕方がないので、少しの晴れ間を機會に、逃れ歸つた、併し意地惡い雨はうれつきり、花火の音は時折僕が枕を動かすのである。覺めて三十一日の朝五時、車を駛せて度津藻船會社まで行く、蓋し渡航せんとはするのだ、未だ少しは早かつたが、土産の桃などを買つてる中にポツ〳〵他の客も見えた六時、酒田行の艀が出る、見送る人見送らるる人、互に交はする言の葉はなんと親しいではないか、顧れば浪人には見送りもない（乘船券が來ぬので不平滿々）舟の影が將に沒した頃、遽しく駈けて來た商人風の夫婦があつたが、外目ながらも其落膽した顏を見ては、誰れも同情を寄せねばなるまい佐渡行の人はもう會社前を充たした、見れば紳士も居る、學生も居る軍人も居る、或は此中に知己でも居まいかと、鵜目鷹になつて見廻すと、居た〳〵。

計らずも、M兄A兄、T兄と手を握つた僕の喜びや知るべしだ。因に言ふ二兄は學生でT兄は軍人である。なつかしき語を交へてゐる內に、早時刻時は近づいた、桃寶は急に値を下げる、揃いの眼鏡（伊達ッ）を掛けた二名の騎兵は、長劍の柄を握つて立つ鈴は鳴る。やがて艀に乘つた。

舟は徐々に河を下る、水戸は靜かである（淺い爲本船は沖にゐるのだ）僕はA兄と語る思へば十年后の再會であつた、僕が見忘れたのも無理はあるまい、兄に呼ばれて始めてもしやと思つたのだが、兄も同樣M兄の呼ぶ迄は知らなかつたらうだ。

河口を出る、風はよい、かれこれ三十分もかかつたであろう、漸く本船へ移つた、A兄は船に弱いとて直ちにルームに入る、同病の僕も續いた。多くの人はデッキにあるのでルームは割合に餘裕があるで勢ひ寢心地もよい。八時になつた。堆進器の音は喧しく起つて船は動き出した。

僕は船暈豫防の一策にと、眠らんとしても中々眠れぬ、絶えず小い圓窓から吹き入る風が、馬鹿に心地よい、A兄は時々パチリと眼を開けて、僕の視線と衝突する、しかし言葉はないのだ。向ふの隅際では團羽片手に、しきりと何やらの話し聲、折々は笑ひ聲も交つて來る、所謂船に强き人達であろう。故郷！港から家路の風景が頭に描かれる。ポウーと鈍い滊笛の音に眼を醒ませば船は停まつてゐる、はて何處であろうと怪しむ矢先、四五人先の若い男（商人風）が水津だといつた、其隣りに居た若い女が眞實でいかと念を押した。起きかけた僕等は又寢轉んだ、するとデッキが何となく騷々しい、彼男は見れば、大きな風呂敷き包を背負ふ所、さてはと氣がついて見ると夷彼男はまだ、眞實の水津だと笑つてる。

船は棧橋に横村になつた、橋上に立つた時あゝと言ひ知れぬ、なつかしい叫びが幽かに心に觸れた、直樣某旅館に投じたのは十一時頃である。所が偶然〳〵ここにはなつかしき父上見ゐて、共に其不意なのに驚いたが、其中には十分喜びも含まれてゐた。

うこで一休後直ちに、從つて歸宅の途についたが、北にはなつかしき金北山がむゝよく歸つたと許り聳えてゐるのだ、前には加茂湖が、いざこれへと控へてゐるのだ。其他眼に觸れるもの、河といはず、林といはず、家といはず凡てが僕を歡迎してくれるのだ。

吾潟を過ぐる時、フト近江の琵琶湖を思ひ出した、それは大津附近の湖形によく似てるからだ。八勝の中の鳥崎の松といひ、湖鏡の晩鐘といひ、殆んど相似してゐる、然して其周邊の鬱林を見た時、彼の江州の禿山が眼にチラついて、思はず微笑まれた。

潟上の朝鮮坂から、湖影に別れて、無事家に着いたのは午後の一時頃。

此夜は一家團欒、遙か一年振で家内六人と卓を同うした、母上は今夜の賑がに比して昨夜の淋しさを語つた、武坊の喜びは又、皆の喜びであつた、それにしても驚いたのは、武坊の辯口である、去年の夏はまだ頗るトンチンカンであつたに、さてもこんなになろうとは、僕も亦省みざる可らずだ。

かくて陽氣づいた夜は、靜かに更け行く、新しき蚊厨に圍まれて、昔の書齊に愉快な眠りについたのは、何時であつたやら（完）

小品　一題

虫の聲

葦秋

夕ばえの色が美しい。

もう、あたりが薄紫にかすんで夢のやうだ。

ふと黄ばんだ秋草の中でコホロギが啼く。淋しい。それが極めて靜かで微かである。可愛いゝやうな悲哀のこもつた聲だ。

秋の憂愁に咽んであの悲しい哀れな聲を奏でるのであろう。

ほら〳〵と萩の花が散る。

紅葉

嶂雪

紺碧の空がたかい。

山々が日增しに紅う色ついてきた。美しい春の花よりも詩的だ、翠のなかに紅う點綴して錦を織りなすは、若い血潮が湧きたつているやうだ、あすこに栗の黄葉が秋の寂寥を色づけている。

と紅葉が二ッ三ッヒラ〳〵舞ひたつて、秋の聲を奏でる溪川へ……。

通信

佛都便り　其二

曾山子

◎木曾山の木葉色を變じて黄雲變幻き觀光の雅客漸く多く將に筆に畫に勝を唄はれんとするの候と相成候折柄我敬愛せる諸君に希くは一段の御自重以て一面正義の爲め混沌たる現社會に抗し我林業界の爲めに御奮勵あらん事を

頃日宮崎縣技師なる一友よりの來信に該地は目下尙頻に海水に浴し朝夕だに浴衣一枚なりと種ケ嶋あたりの園原頓狂兄や四國の乙谷君其他の西南方面に奮闘せらるる諸君の如何に木曾山の色づきの早きに驚かるる事なるか。

◎余本年一月の頃天下三奇人の筆頭故保科五無齊先生と快飲し大に現代教育界の通弊を論ず實は謹聽したのだ先生の實物教育主義の甚しく我意を得たるものあり共に小學校の學校園設置の奬勵を約すしかも其人今や亡く僅に余寓居箱庭の一隅に一小學校に寄附すべき百餘種の日本樹の秋風に搖ける影を留むるのみ然りと雖も其主義たる偶然余が道樂の或るものの研究と一致す往々

他よりヴアライティを以て目さるるは蓋し此邊より出しものとせば余は大に甘受するものに御座候

◎森林植物の事にて近日知り得たる處少しく御紹介申上候　㊐

樺木科はんのき屬に於て從來ヒメヤシャブシ（はげしばり）はヤシャブシの變種となる（少くも從來の諸書には此分類法に依る）然るに松村博士最近の分類法に依るに我國のヤシャブシは二つに別つことを得

（1）アルヌスシイボルデアナマツムラ

（2）アルヌスヤシマ　マツムラ

而して我ヒメヤシャブシはアルヌスペンヅフマツムラとせり

其特徴は

（1）葉全形丸味を帶び葉柄裏脈上毛なし球果は一梗一果にして鱗片長狹なり

（2）葉全形前者とヒメヤシャブシとの中間にありて葉柄葉裏の脈上毛あり一梗二乃至四五果を付く但し多くは三果なり然して鱗片短廣なりとす

尙同博士の研究に依ればアルヌス（日本產）には三種の變種ありと云ふ

然して本郡山岳崩壞地の砂防植栽にほ多くヒメヤシャブシを用ひ從來本縣にても愛知滋賀邊の例に倣ひ該種を試播して良結果を得ざりしが昨年よりヤシャを播種して好成績を擧げたれば其后はヤシャ並にヤマハンノキを以て崩壞地植栽にあてんとす又大平峠（西筑摩下伊那界の）火崗岩並に片麻岩の地質の崩壞地赤松雅樹の植栽に依て良結果を得たるに鑑み松類の適樹種なることを信す

◎先便申上候通り余は本年八月岐阜市に昆虫取調を被命約半ケ月を彼地に費し候而して昆虫研究所の規定として昆虫に關する所感につき五分間演說をなさしむ時に余の陳べたる大要次の如くに候間御笑草までに申述候國民に昆虫學の思想を普及せしむるは刻下の急務なり直接生產の業に從事するものの害益虫との利害關係上其習性經過の狀を知り之れが利用撲滅の策を講ずるの要あるは云ふに足らず然がも一般國民をして昆虫學の思想を普及せしむるの要を適切に感じたる所以のものは彼の艶麗色彩四邊の欣仰と美望とを併せ受くる蝶類も蠱蟑鈴虫等が同好朋輩互に美音に醉ひ風凉しき綠の褥に一世の榮譽を誇るの時獨り鐵も溶けんが如き夏日の炎熱を意せず未明より出て日影漆き昏黑まで努力不撓倦く事を知らざる蟻や蜂も又人をして思はず面を外にせしむる糞尿の間に一生涯を托して其悖らざらんを慮るの樣を見て日に生存競爭の劇甚を加へ一世浮華輕佻權謀術數を弄れ事とせる人類の現社會に對照し來り如何に趣味多くして且つ深き關係の存するを好問題なるかに鑑み世の不遇を咄ち無情に泣く或は天賦の資を噴火口に投じ碧潭に捨つるの徒をして昆虫社會の狀態を知らしめ各自の貴き天分を享有せるに悟らしめんとするの事なり余は天の配劑の微妙なるを窺ふ每に健全なる社會を建設し帝國を泰山の安きに置くは先つ昆虫學思想の普及にあるを思ふ所以なり

◎三年一と昔と云ふ吾徒の校門を出でしより茲に既に三昔に垂んとす其間師の君の東西に袂を別たれしもの同窓の懇親を結べる二三諸君の世を捨てられしもの有りて過去を顧みる時は懷舊の情に耐へざるものあり然して今や余が知れるものにして二豎の襲ふ處となりて或は病院の一室に呻吟或は自家に加養し或は悠々自適しつつ加養せらるるもの次の如くに候へば何卒御同情を寄せられん事を希望に堪へず候　敬具

次號よりは數回に亘りて本縣森林行政に付き卑見を申述ぶべく候

神奈川縣高座郡茅ケ崎高田病院　原　四郎君

木曾三岳村自宅　正又　實次郎君

木曾吾妻村自宅　代田　善次郎君

北安曇郡常盤村自宅　太田　喜代松君

雜報

學校彙報

○河野先生告別式並送別會　一昨年以來本校教諭として農學、氣象、地質、英語等を擔任され熱心盡瘁せられし河野先生には今回家事上の御都合に依り退職せらるる事となりしを以て九月十九日午後零時四十分雨天体操場に於て告別式を擧行し次で講堂に於て送別茶話會を開き席上生徒の惜別演說先生の答辭等あり一時間餘にして散會せり越えて廿一日午後五時職員生徒一同停車場に先生の出發を見送れり

◎見學旅行　第三學年生一同は運材視察の爲七宮教諭に引率され九月廿八日出發瀨戸川、阿寺、柿其等數箇所の運材法を視察し十月一日歸校せり

○茸狩　十月六日秋晴に乘じ全校擧つて茸狩を新開村高澤山に催し松茸數百目雜茸一貫目許採取豫て携帶せし大鍋を溪流の邊に裝置し煮沸して一同香味に舌を皷し一日の歡娛を盡して午後四時歸校せり

◎佐藤教諭新任式　十月九日零時四十分雨天体操場に於て今回河野先生後任として赴任せられし佐藤教諭新任の挨拶ありも因に先生は山形縣の人河野先生と仝じく盛岡高等農林學校の出身なり

明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可

○校友會役員變更　矯風委員前田喜代次郎氏は都合により十月七日解職されしを以て後任として西尾嘉一氏任命せられたり

○在校生の訃音　第三學年生濱武雄氏は去七月下旬病氣の爲歸鄉療養中の處本月七日病勢革まり藥石效なく遽焉死去せらる又第二學年生松原好之君は九月下旬發病の爲歸鄉療養中の處病勢益加はり遂に本月九日死亡の報に接す因て校友會は吊辭に添へて香奠料一圓宛送付せり嗚呼僅に數日を隔てず吾人は前途有望なる二君を失へり吾人の悲何物か之に加へん噫

○健兒の遠征　來る十五六兩日松本中學校に於て開催せらるる縣下中等學校聯合運動會に參加する爲我校庭球部選手六名擊劍部選手三名は十四日遠征の途に上れり選手の氏名左の如し

庭球選手　安藤次郎君、杉本直君、代田文之助君、吉池三九郎君、伊藤昇次君、今泉彌作君、

擊劍選手　坂田勘太郎君、細江七兵衛君石曾根　郎君

寄宿寮より

越　畔

長き暑中の夢醒めて茲第二の古巣城山の寮に立ち歸りしは僅か四旬前のことに候當時は一名赤馬事痩蚤君の襲來甚だしく爲に煩悶もなき大の男が終夜轉々たる有樣にて心惜くもあり且又滑稽にもこれあり候ひき仝月六日頃は恰度當地の盆にて有名なる木曾の中のりさん踊も見物いたし候學生が盆踊りを見たとて何になるかといふ御人もなきにあらざれども其處は人情に候スチウデントとて何もブックに許り首引きするが能にもこれあるまじく候　遙々遠き此山中に寄留しをるからには多少學事以外即ち人情風俗の研究（と申しては ちと可笑しけれど）も必要かと存じ候小生嘗てさる人に福島の商業上の点に付て問はれし事これあり候ひしが殘念乍ら『知らず』の一語を以て答へしに『君は彼地に何をしてをるか』といはれ候事極端には屬すれども味ふべき者なしとも申されず候

扨（トンチンカンの辯解めいた事は止して）又七日には寄宿舍の主催にて小丸山上に盛大なる觀月會これあり候ひき（是は前號にて御承知の筈）仝八日は信濃毎日新聞社主催御嶽登山隊の歡迎の爲關山公園にて花火打揚げられ誠に愉快に見物いたし候尙年二回の馬市も仝十一日より開催され農業智識の一助にも成らばやと視察に出掛け申す者もこれあり候ひしが月の十五日には亦例年の通り御嶽及駒ケ岳に登山いたし候其時不幸病（脚氣等）の爲め留守居せし者も數名これあり候ひしが誠に殘念なる事と深く同情いたし候仝夜は高き雲の上に夢を結び候ひしが風雨の襲擊さては急坂の疲れ等苦しき中にも得る處少なからず候ひき下山の御土產には珍らしき高山植物や珍無類の大蚤君にて候ひしが此蚤君こそ實に紀念物を造りし恩人否恩蚤に候

九月の空も將に盡きんとする二十八日には例に依つて三年生諸兄が利用學實習の爲瀧阿寺三留野の方面に出發され候仝日より本月一日に至る三日間は流石に寂しく相成り申し候六日には又植物採集として黑川方面に出掛け申し候彼山深き溪川の邊りに各自採取せる茸類を煮て中食を瞰する味ひは到底狹苦しき食堂のりれに比すべくもあらず候

終りに際し生等は斯の如き有益にして且愉快なる擧に益々多からん事を希ふものに候徒らにマッチ箱主義にて陋屋の一隅に病人然と詰め込むは可惜國家有爲の青年をして身体衰弱精神薄弱の悲境に陷らしむる者に候かくては元氣を生命とする吾人は全く命を奪はれし者といはざるを得ず候近來當寮生が脚氣其他病魔の襲來に一もなく參り候は返へす返へすも殘念なる事にて監督諸先生も共に憂へらるる處に候

既に鄉里靜養中の某々二君の如きは遂に歸らぬ旅に赴かれ候由尙又靜養中の者もこれあり吾人亦深く省る所なきにあらざれども唯々完全なる新寮の竣工一日も早からんを希ひまり候（濱松原二君の訃に接しつゝ）

叙任辭令

長野大林區署（八月二十三日）

本署勤務を命ず松本小林區林務技手　中村豊治

青森大林區署（八月十七日）

任林務技手　增川小林區森林主事　竹内房太郎

山梨縣（六月二十六日）

山梨縣林業技手に任ず　矢島駒二

東京大林區署

任森林主事　雇　岡戸都二

名古屋帝室林野管理局支廳

付知出張所在勤を命ず技手（阿多野）　上田鉐二

會費領收報告

壹圓　矢嶋駒次君、七拾貳錢　河嶋憲一君、七拾錢　磯村益雄君、五拾錢　宛一瀨袈裟壽君、澤田貞次郎君、森正治君、森巖君、四拾貳錢　古根是君